

## 令和7年度入学試験問題(後期)

# 小論文 1

(人文社会科学部)  
(90分)

**【注意事項】**

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験中に落丁・乱丁や印刷の不鮮明な箇所などに気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせて下さい。
3. 解答用紙1枚と下書き用紙1枚を配付していますので、確認して下さい。
4. 解答は必ず解答用紙に記入して下さい。解答用紙以外に記入したものは無効です。
5. 監督者の指示に従って、解答用紙の指定された欄に受験番号を記入して下さい。
6. 解答用紙にアルファベット、算用数字を記入する場合には、1マスに2文字ずつ入れて下さい(ただし、字数が奇数の場合は、末尾の1文字は1マスに入れて下さい)。
7. 配付された問題冊子および下書き用紙は、試験終了後、持ち帰って下さい。

以下の文章を読み、「文化」に関する筆者の理解を整理した上で、文化はどうあるべきかについてのあなたの考えを800字以内で述べなさい。

東洋でも西洋でも旧来の文化理念はもはや有効性を失っている。人は文化なくして生きてはゆけない。文化理念の再構築が世界的課題である。そこでもう一度、一から考え直してみよう。

経済は合理的で、文化は非合理的である、という通念がある。文化は金食い虫ともいわれ、企業の文化事業は営利活動の免罪行為、社会への寄付行為、慈善事業の感がある。企業も文化を軽視してきた。その一因は文化についての理解がせまく、神社・仏閣・芸術・芸能などにかぎられてきたからである。政府も文化庁を文科省の所管にしているように、教育・学術を文化だという狭義の文化理解に立っている。

文化については学問による定義ののっとなって理解するのがのぞましい。文化を専門に考える学問は文化人類学(=民族学)といわれる。民族学とは民族の文化と社会を研究する学問である。民族学によれば、文化の定義は端的には生活様式である。祭り、コンサート、歌舞伎などだけが文化ではない。それらは文化のいわば花の部分である。葉、茎、根にも眼をくばらねばならない。「文化」認識は世界共通の学問的定義にたつべきである。その定義を平たく言えば「暮らしの立て方」である。

暮らしは目にみえる物と目にみえない心からなる。目にみえる物を見れば、名前があり、用途がある。生産者は売れない物は作らない。消費者は使わない物を買わない。物を使うのは日々を生きるためであり、衣・食・住の生活である。どのような物を使うかは人によって、そしてその集合である民族によって異なる。人の使う物が異なるというのは当たり前である。そして経済とは人間と物との関係にほかならない。ノーベル経済学者のA・K・センの言葉をかみしめたい——「経済学は人間と財(物)との関係を問題にする」。

使う物が人によって異なり、民族によって異なるという事実にこだわってみよう。経済は生産と消費とからなる。生産者の課題はいかにコストを下げるかにある。企業にとって価格は重要な指標である。しかし消費者にとって価格は指標ではあるが、唯一ではない。ほかにも、たとえば応接セットがたたき売りされていても、家のなかに置き場がなければ買わない。代替財や補完財の存在、あるいは品物が日常生活に合っ

ているかどうかは購買動機である。人の消費する物は、多数の物の組み合わせからなっており、その組み合わせが暮らしの立て方に個性をもたらしている。暮らしの立て方は型として生活様式になっている。それが文化である。

使う物の組み合わせが一人ひとりちがうことによって、民族は個性として現われる。民族は文化複合体である。日本社会の生活様式には外国人からみれば共通性があり、それが日本文化である。人は消費をとおしてライフ・スタイルを決める。決めていなくてもライフ・スタイルが現われる。人のアイデンティティは物をとおして現われる。ある人が何であるかのアイデンティティは、その人が衣食住に使っている物を洗い出せば、正体を割りだせる。刑事事件で現場の遺留物から関係者を割り出すのは、捜査の初歩である。どのような物がどう使われているかに文化の正体が現われる。言葉はわからなくても衣・食・住の現場で使われている物をみれば文化が分かるのである。まとめてみよう。

一、人は物を使わなければ生きていけない。物は人間の本質的条件である。人間は使っている物をとおして自己を表現する。物は人間のアイデンティティを映す鏡である。使う物の総体が社会の生活様式すなわち文化をかたちづくる。

一、経済は人と物との関係からなる。物は文化と不可分である。国富は貨幣で表わされる。国富の中身は物の集合である。日本人が作ったり使ったりする物の集合が日本の国富をかたちづくり、それが現代日本の景観をつくっている。それゆえ、日本という国の経済は日本文化の表現である。

(川勝平太『「鎖国」と資本主義』藤原書店、

引用に際して必要な修正を加えている。)